

『冬将軍』 岩本憲嗣

子供の頃ってのは誰でも不思議な体験の一つや二つするものです。十年を一昔と称するならば、そう、これはもう二昔も前の話。

当時僕は小学3年生。ローラースケートに憧れて光ゲンジを口ずさみ、必死になってミニ四駆を改造して、一人3つ迄のビックリマンを駄菓子屋で買ってその中身に一喜一憂する。当時としては実に平均的で健全な小3だったわけです。

健全でない点があるならば、僕は冬という季節が大嫌いでした。

日が短いから長く遊べない。痛いからと誰もドッジボールに付き合ってくれない。一年中半袖半ズボンの澤田君でさえ出不精になる。女子のリーダー格である本間の誕生日がある。大人からしたら些細なこと。でも子供にとっては死活問題であるそれらの理由が僕を極度の冬嫌いに仕立て上げていました。

冬なんて来なければいい。

秋の終りにはいつだってそう思っていたものです。

それは十月の終りの土曜日の出来事でした。

午前授業が終わり、一目散で校門を出るとそこには“アクトク”がいました。

“アクトク”という表現はウチの小学校だけかもしれませんが。でも僕と同世代ならきっと経験があるのではないのでしょうか。

ファミカセやラジコンといった小学生にとっての“宝”をチラつかせて、子供相手に学習教材を勧めてくるような悪徳商法の類です。

アクトクは声をかけてきました。僕は無視を決め込みました。しかしアクトクは続けます。

「別に高いもの売ったりしねえよ。シャーペンの芯。おまけつけるからよ」

「別に文房具屋でも貰えるからいい」

「馬鹿、あんなババアの消しゴム人形じゃねえよ。シールだ。しかもヘッド」

ヘッドというのは当時大人気だったビックリマンシールの中でも滅多に手に入らないホログラムのシールのことです。

そのヘッドという響きは小3の信念を折るのには十分な威力を持っていました。アクトクは図柄を隠しながらシールを差し出しました。

「特別に百円で譲ってやるよ」

悲しい哉、ヘッドという魅惑の言葉に負けた僕はアクトクの話にまんまと乗ってしまった

わけです。

『冬将軍』

いかつい甲冑をつけて雪だるまを従えたキャラクターにはそう名前がつけられていました。しかし、それは絵柄の雰囲気こそ似ているものの僕の知っているビックリマンシールのキャラクターではありませんでした。

「なんだよこれ。ニセじゃんかよ！」

抗議する僕に、アクトクはしゃがみこむと視線を合わせて語りかけてきました。

「ニセなんかじゃねえ。あんなお菓子のおまけよりビックリするシールだ。いいか、このシールの中には冬が閉じ込められている。こいつが今が冬だって気づかない限り冬はやってこないんだ。でもオジサンには暖かい家もないからすぐに気付かれちゃう。寒い嫌だろ？ 任せたぞ少年」

そんな馬鹿げた話あるはずない。小3にだって分かりました。でもアクトクのあの真剣な目があまりに印象的で、僕は家に帰るなり一番暖かそうな布団の中に冬将軍をしまいました。

程なくして僕は一気に心変わりすることになります。

その年はまさしく異常気象でした。一向に寒くならない。雪も降らない。テレビでも記録的な暖冬で経済がどうのこうのと騒いでいました。

世界経済がどうなろうと子供の世界には関係ありません。

毎日遅くまで澤田君達とドッジボールが出来る。ミニ四駆レースが出来る。あのシールの恩恵を多分に受けていたわけです。

僕は冬将軍のシールを毛糸でぐるぐる巻きにしていつも懐に忍ばせていました。絶対に冬であることは気付かせてはいけない。一時たりとも目を離してなるものか。

こんな冬なら大歓迎だ。そんな僕の思いには一つ大きな誤算がありました。冬将軍の有無に関係なくやってくる、冬のイベントがあることを忘れかけていたのです。

「面白いものがある」

その日僕は澤田君の言葉を信じて自転車を走らせていました。暫くして一軒の小洒落た家に辿り着きました。表札には『本間』の文字。

「澤田君？」

ポカンとする僕に澤田君はバツが悪そうに、畳みかけるように話しかけて来ました。

「ほら、今日本間の誕生日なんだよ。で、本間にお前をつれて遊びに来いって言われてさ。あ、あれだけ。本間って思った程悪い奴じゃないぜ、俺にヘッドくれたし。それにさ……なんか本間お前の事……」

子供ってのは薄情です。つまり澤田君はシール一枚で僕を本間に売ったのです。そして、それよりショックだったのはその宿敵本間が自分に特別な思いを抱いているということ。

そのパーティは僕と澤田君を除いては全員女子。中心では本間がぎこちない笑顔でこちらを見つめていました。視線が合わないように澤田君の方を見ると彼は女子達と一緒にキャッキョと人生ゲームに興じていました。

女に囲まれたときの男の態度ってのは子供も大人も変わらないものなのです。

早く帰りたい。しかし澤田君を残して帰るワケにはいかない。楽しそうにしてるけれど女子の中に一人にしたらきっと気まずいだろう。でもその澤田君は一向に帰る気配がない。

結局僕らは夕飯までごちそうになることになりました。

食卓にデンと鎮座したしゃぶしゃぶの鍋。初めて出会った代物でした。

「美味しい？やっぱりみんなでお鍋囲むと冬が来たって気がするよね」

隣に座り肉を勧めてくる本間のその異常な甲斐甲斐しさだけが苦痛でした。

しかし僕はその日、十年の人生で初めてハンバーグより美味しい肉の食べ方を知ることになったのです。しゃぶしゃぶ。なんと美味しいのだろう。

本間と近くに居すぎたせいか少し寒気のした帰り道。家に帰ると僕は満腹の気持ちよさですぐに眠りにつきました。

翌朝。……僕は寒さで目が覚めました。窓を開けると外は一面の白。

「そんな……」

毛糸をほどいて確認したそれはただのホログラムのシール。そこに冬将軍の姿はありませんでした。

月曜日。寒くて辛い五時間目までの授業を終えて校門を出るとアクトクが立っていました。

「残念。勘付かれたな。お前冬を楽しんだりしなかったか？」

懽然としたままの僕にアクトクは続けました。

「シャーペンの芯買ってくれよ。今度はこれやるからさ」

そう言って差し出す手にはまたホログラムのシール。また別のキャラクター。どことなく本間に似た顔立ちのそれには『鍋奉行』と書かれていました。

【終】

※2009/11/28-29 C2-Reading vol.06 『冬』にて栄克夫名義にて発表・公演

※ご利用上の注意※

- ・本作はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・本作をご利用頂く際は必ず作者（gumba1227@hotmail.com）までご一報頂けますようお願い致します。
- ・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・仲間内で集まっての練習でのご利用。
- ・Skypeなどを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・各種配信サービスによる配信・生配信など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をご記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com（岩本）